

社会学の扉を開けて

—デュルケムへのアプローチ—

夏 刈 康 男

はじめに

2017年4月20日に日本大学社会学会会長の松岡雅裕先生から7月22日開催の日本大学社会学会での退職記念講演を依頼された。その時に松岡先生は、私がなぜデュルケムを研究することになったのか、きっかけは何だったのか等について話してほしいということ言われた。2〜3日待ってもらって皆さんの前で話してできるような内容的生涯であったのかどうか考えた。

自分がどのような契機からデュルケムを対象として研究を始めたのかを中心に振り返ることは自分の研究史をまとめ反省する機会ともなり、自分自身にとってもまたとない機会だと認識してこのお話を受けることにした。この場を借りてこうした機会を与えてくれたことに感謝申し上げたい。

さて、早速どのようなきっかけでデュルケムに関心を持ち、研究対象としていったのか、デュルケムに浸った約40年間の一部分を振り返りたい。

1. なぜデュルケムだったのか

デュルケムを研究対象にしたことについては、いくつかの理由あるいは要因がある。その中で2つだけ簡潔にまとめると1つは、私の学部から大学院にかけての学生時代は、実存主義のサルトルを批判して構造主義を説くレヴィ・ストロースが台頭し、世界の思想界を席卷していた。当時、構造主義を語らなければ知識人の仲間入りができないといった風潮を感じたほどで、ごく自然に構造主義とはどのような学問なのか興味を持った。レヴィ・ストロースの説く構造主義は、何らかの主義を自称するのではなく、1つの認識の態度、換言すれば、問題に注目し、接近し、それを取り扱う際のノーハウ (savoir-faire) である。

構造主義とは1つの研究方法及びアプローチの仕方であるとする考え方やさらに社会の本質とは無意識の意識であるといった観念は社会学に適用できると考え、彼のそうした考えを本格的に知りたいと思い、彼の観念の源泉を先ずたどることにした。それによって民族学のパイオニアであるM.モース、さらにモースの師であるデュルケムへと行き着いた。

デュルケムからレヴィ・ストロースへという社会学的思想潮流を先ず研究したいという強い思いは、大学院の学生時代にフランスへの留学を実現させた。コレージュ・ド・フランスでレヴィ・ストロースに会った最初に彼から研究テーマを聞かれレヴィ・ストロースのオリジンとしてのモースとデュルケムの研究と答えたことを記憶している。

構造主義者レヴィ・ストロースへの関心からデュルケムへと行き着いたが、当初はデュルケムについては4～5年程度研究し、その後モースそしてレヴィ・ストロースの研究に専念しようと考えたが、結局デュルケムにのめりこんでしまった。それは、留学した1975年にそれまで公になっていなかったデュルケムのほぼ全ての論文類を集めて出版された3冊のデュルケムのテキストの公刊とそれを契機に興ったフランスにおけるデュルケム研究の復興がおおいに原因している。

2つ目は、高校時代の親友の死がデュルケム研究の動機づけと深くかかわっている。彼は高校2年生の春休みに入ったその日に突然自殺してしまった。その前々日、高校から小田急線で一緒に帰宅する際、来年の大学受験をどこにするかといった話をして別れたばかりだった。親友がなぜ自殺したのか、その原因についてずっともやもやしている中で自殺の要因を社会学的に究明した『自殺論』と出合った。そう簡単に人の死の原因などわかるはずがないものの、その著書は自殺には個人的心理的精神的要因ばかりでなく、社会的要因があることを統計データを用いて論じていた。客観的に問題を対象化する科学であることを『自殺論』から学び、そのことがデュルケムへの関心を持ち、高めることになった。

エピソード（1）

コレージュ・ド・フランスは、学生登録不要でももちろん授業料もとらない。関心と学ぶ意志さえあれば誰でも受講できる。ただし、ゼミナールは、事前に担当教授の許可を取る必要がある。

私の場合、フランスに留学した経験のある人たちからいろいろ情報

を得ていたが、コレージュ・ド・フランスについてのそういった情報は得ていなかった。そのため大学でどのように手続きしているのか何もわからずコレージュ・ド・フランスに10月に行き、正面玄関に入り立派な階段を三階まで行き大きな扉に学長室と書いてあったので手続きの仕方などを聞こうとノックをした所、学長がおられ部屋に入りなさいと手招きされ、要件を聞かれたのでレヴィ・ストロースの講義とゼミナールを受講したいと言った所、上記のような説明をされたのであった。今思い出しても恥ずかしいが、その時はレヴィ・ストロースの授業に出たいという一途の思いがそうさせたのであろうと思う。なお、その年度はレヴィ・ストロースの他に哲学をミッシェル・フーコーが、社会学をレイモン・アロンが講義していた。

『自殺論』は、1897年に刊行された古典ではあるが、現代性という点からこの著書を見て、今なお色あせてはいない。例えば、人はなぜ自殺をするのか、その要因を分析する上で、自殺は精神的心理的な、いわゆる非社会的要因のみならず、デュルケムの説く人間関係の希薄な社会（個人化した社会）での自殺、自殺を受け入れ美徳とするような社会のあり方の中に自殺を促すようないわば社会構造のあり方に因る自殺、所属する組織を守るためにする自殺、社会規範が弛緩し欲望を制御できない社会システム下での失業や倒産による自殺、そして先行きの見えない閉塞状況あるいはいくら努力してもむくわれない絶望的社会での自殺等々の社会的要因説は今日生じている子どもの自殺も高齢者の自殺も全て含めて、いかに自殺を抑止し得るか、その策を考える上でも有用である。

2. 目標

次に、日本大学文理学部社会学科に職を得た時に研究者としての大まかな目標をたてた。そのうちの主なものを紹介したい。まず最初に考えたことは、数10年後定年退職を迎えて研究者人生を振り返った時に（今まさにその時である）、自身で満足できるような研究成果を残しておけるように努力すること。そのために目標を課した。それは、年に1回学会での口頭発表と、それを踏まえて論文にまとめ発表すること。幸いにも、日本大学社会学会では「社会学論叢」が年3回発行されており、そこに論文を掲載できるチャンスが大いにあった。若い頃は、恩師の馬場明男先生や斉藤

正二先生に論文の指導のため原稿を持参すると、「論叢」に回しておいたからと「論叢」に掲載してもらえた。いい時代だった。

年1回の学会での口頭発表は、日本社会学会、日本社会史学会、日仏社会学会を中心に行った。口頭発表は本当に楽しかった。それは、デュルケムを専門にする他大学の先生や同じ年代の研究者と毎年発表会場で学的交流ができ、多くのことを学ぶ機会が得られたからである。そうした学会活動をつらつらと思い出してみるに、中久郎、内藤莞爾、新睦人、福鎌忠恕、宮島喬、浜口晴彦、船津衛、小林幸一郎、佐々木交賢、中嶋明勲、児玉幹夫、老川寛、大野道邦、P.アンサール、M.メッシュ、J.デュヴィニョー、A.ベルク（敬称略）等、フランス社会学及びデュルケムを専門にする先生方には、時に厳しく、時には温かく接していただき、私の学業生涯を豊かにしていただいた。

口頭発表及び学会誌への投稿の他にもう1つ課したことがある。それは、翻訳を含めて著書（単著）を出版することである。そのうち翻訳は30歳代前半までに出すこと、そして著書（単著）は、40歳半ばまでに自身の代表作として世に問えるような本を出し、それを母体に博士論文とすることであった。本を出版することは想像以上に大変なことで、ただ翻訳したり、研究して原稿がまとまれば、それで本にできる訳ではない。出版を引き受けてくれる人がいなければ実現できない。振り返れば本を出すに当って必ず誰か後押しをしてくれた人がいた。

エピソード（2）

日仏社会学会（福鎌忠恕会長）の推薦を受けて日仏会館学術委員会により昭和63年度日仏学術使節としてフランスに派遣されたことがあった。活動の拠点は、招聘してくれたパリ第七大学であったが、そこには『ブルードンの社会学』『サン・シモンの社会学』の著書で知られるP. アンサールや知識社会学、文化社会学を専門としたJ. デュヴィニョー等がいた。彼らは第二次大戦後のフランス社会学界でデュルケム学派に代わって一大勢力を築いたギョルヴィッチ学派を引き継ぐ社会学者たちである。

当時、彼らは戦後のフランス社会学の潮流の中で第二世代と目され、知識社会学グループを形成していた。

デュヴィニョーは、時々アンサールの研究室に来て私に当時のフラ

ンス社会学の状況話をしてくれた。そうした中で、デュルケム研究者でもあった彼がデュルケムのフランス社会学への影響はどのように変化していったのか語ってくれた。彼によれば、デュルケムの影響力は、「社会学年報」の休刊と彼の死によって衰え始め、第一次大戦後は、彼の最初の弟子たちであったモース、アルバックス、ブグレ等が活躍したものの、彼らとデュルケム社会学との間には学問的距離が生じた。そして、両大戦間にフランス社会学は、ギルヴィッチとR. アロンを中心にウェーバー、パレート、マルクスとそれにアメリカ社会学に関心を強めた。今日のフランス社会学は、デュルケムの定量的研究、集合意識論、連帯論、アノミー論等の諸観念の重要性を認めつつも、もはやデュルケムは一人の参考人に過ぎなくなってしまう、ということだった。

初めての翻訳は、P.M. ブラウ編著の著書で幸運にも助手になる前の大学院生の頃に齊藤正二先生の監訳で3章分の分担翻訳をさせていただき、『社会構造へのアプローチ』として八千代出版から刊行された。この出版を契機に八千代出版社とはその後40年間おつきあいさせていただき、何度も著書の出版でお世話になった。

しかし、若い時代の私にとって重要なことは、ボルドー大学に所属する研究者の著わしたデュルケムに関する研究書をできるだけ早く翻訳出版することであった。ボルドー大学所属の研究者にこだわったのは、デュルケムが苦勞の末初めて大学講師に就任し、そこで連帯論、自殺論、犯罪論等々を教えながら社会学の市民権を獲得し、「社会学年報」を発行し、自身の弟子も養成し、デュルケム学派形成の足掛かりを築き、社会学者としての確固とした地位を構築したのがボルドー大学であったため、その伝統の中にあるボルドー大学のデュルケミアンの著わした研究書にしたいという、たわいもない理由からである。

そんなことを気にしながらほど良い文献を探していた所、E. シャゼルの小さなデュルケムの研究書を見つけた。シャゼルは、その本が出版された1975年当時は、P. Birnbaumと共同で“Théorie sociologique”と題する編著を出版するなど、ボルドー第二大学の新進気鋭の専任講師であった。その後彼は、パリ第四大学でパーソンズ研究者としても活躍している。翻訳したシャゼルの著書は、デュルケムの『社会学的方法の規準』を中心に分

析、解説したもので、デュルケムの方法と対象についての基本を学び、デュルケム社会学の本質を理解するのに適した文献であった。当初、翻訳していつまでに仕上げるか、きっちりした計画のないまま、そのうちに出版できればとのんびりかまえていたが、しかし助手になって数年経ったある時、深田弘先生が研究室の私の席まで来られてデュルケムとカントやルソーとの関連をきちんと見る必要がある等々のアドバイスの中で、フランスをやるからには早いうちにフランス語の文献の翻訳を1本出しておくと、ドンと背中を押されて出版を覚悟した。

とはいえ、単独で本を出すことなど初めてのことで、翻訳権はどのようにしたら良いのか、出版社とどのように交渉するのか等々わからないまま相当時間が過ぎた頃、日本社会学会史学会の事務局幹事をしていて、その学会の「年報」の発行でお世話になっていたいなほ書房の星田宏司社長に相談した所、翻訳出版を快諾していただいてすぐに刊行することができた。

翻訳は、横のものをただ縦にするだけ、という言葉を書くことがある。しかし、異なる文化と社会の中で創られ、表現される言語を日本語として読めるようにすることは、そう簡単ではない。一言一句訳をして日本語として読めるようにすることは、根気と勇気がある。加えて、苦勞して翻訳する過程で、原典で用いられている言語、概念、背景等々について理解しようとして幅広く調べ勉強するために翻訳はその後の他の研究にも大いに役立つことをその時、学んだ。

その文献の翻訳出版を終えた時、もう1つ研究の目標を思いついた。それは、大学でこのまま仕事が続けられれば、私の退職する年齢(70歳)は2017年になる。その年は、まさにデュルケム没後100年と重なる。そこで、2017年にデュルケムの本質をまとめた著書を彼の没後100年と自身の退職を期して、現役最後の単著を、翻訳ながらも最初に単著を出版して欲しいいなほ書房にお願いし、最初と最後のけじめをつけようと考えた。その時は、先の長い話と思ったが、若い私のつたない翻訳を快く出版してくれた星田社長への感謝の気持ちからそんな思いが芽生えた。その思いは出版社も社長も健在であったため幸いにも『デュルケムの社会学』として実現できた。

著書については、本格的にデュルケムの研究を始めてほぼ15年が経ち、目的としたデュルケムの出自、エピナルでの生育期、成長期、そしてその時期の生活史や社会史等の記録やパリでの学生時代及びリセ教授時代の研

究過程とボルドー大学での研究と教育に関する原資料がちょうどジグソーパズルの全てのピースがうまく当てはまるように整ってようやくデュルケムの社会学形成過程を自信を持って公にできるかもしれないと思っていた所に、不思議なもので出版社の恒星社厚生閣のベテラン編集担当者が私の研究室を訪ねてくれて単著を出版することができた。その編集者によれば、船津衛先生に誰か出版可能な若手がいないか聞いた所、先生から私の名前があがったということだった。その時の話で興味深かったのは、著書の出版には2通りあって1つは、出版社が著者に本の出版を打診して原稿を依頼して出す場合と、もう1つは、逆に著者が出版社に原稿を持ち込んで出版をお願いする場合である。前者の場合は、原稿料が出て、後者の場合は、著者の自費出版になることが多いということであった。そういうことが全てに当てはまるかどうか色々なケースがあると思うが、私としては共著書も含めてその後の著書出版の指針とした。

恒星社厚生閣にはその10数年後に再び大変お世話になった。それは、日仏社会学会が創設されて60年を記念する事業の一つとして社会学叢書を発行した時である。その時、たまたま私は学会の研究担当理事をしていたため執筆者にも学会にも一切経済的負担をかけずに叢書を刊行してくれる出版社を探すはめになった。原稿がどの位集まり、何巻分の叢書になるのかもわからない中できちんと本を出してくれる出版社を探さなければならなかった。いくつか知り合いの出版社に声をかけたが、多くは多少の経済的負担を求められたり、教科書で利用する条件が求められた。そうした中で恒星社厚生閣だけが学会にも論文執筆者にも一切経済的負担なしに引き受けてくれた。結果的に全五巻の叢書が無事出版された。

3. 研究の手法

次に、どのような経緯でデュルケムの生活史や家族史、研究過程に関心を持ち、彼についての研究をすすめていったのか、こだわった手法に的を絞って自分なりの研究史を簡単にたどってみたい。

何と言っても私にとってデュルケム研究の方向性あるいは手法に大きな影響を与えたのは、学生時代に目にしたある高名な社会学史家が著書の中で述べていたデュルケム社会学にはラビ的特質が認められるという指摘である。

ラビ的特質とは一体どのような特質なのか、その著書では特に何の説

明もなかった。デュルケムに関する他の研究書を調べても当時そうした特質について論じた研究はなく、どうすればラビ的特質を調べそして理解できるのか疑問と関心が強くなった。

その時、並行して読んでいた『自殺論』の中でデュルケム自身がユダヤ教徒としての生活体験を論述しているような文章を読み、それがラビ的特質を直接理解させるものでないもののユダヤ的世界を教えてくれるものであり、その生活世界を知ることがラビ的特質を知る手掛かりとなるのではないのか、と大雑把に考えた。

ちなみにそれらの論述は、自己本位的自殺を抑止する集団の例としてユダヤ教徒の自殺率が極めて小さいその要因を説いた中で説かれるユダヤ教徒にかかわるデュルケムの深い洞察において認められる。それらの論述を整理すると1.ユダヤ教徒は、周囲の人びととの敵意と闘わざるを得なかったこと、2.自分たちが生きてゆくためにユダヤ教の教えを守り、その教えに従って自主的に自らを強く律した生活をしたこと、3.周囲一般の憎悪と闘うということは、外部勢力に暴力を持って争うのではなく、自らの信仰を守り、その下にユダヤ教徒自身の絆を強め、信者の共同体を一体化し凝集力の強い小社会を作ること等々である。

これらのデュルケムのユダヤ教徒の共同性と生活をめぐる鋭い洞察は、歴史の中でユダヤ教徒が反ユダヤ主義にいかにか抗して生き抜いてきたかとともに、さらには彼自身の体験も含まれているかもしれない実に重い論述として受け止められた。

こうして先行研究でのデュルケムのラビ的特質とはどういうことなのかという疑問と『自殺論』におけるユダヤ教徒がなぜ自殺抑止率が高いのかの考察とが重なり、そこからその後のデュルケムの何をどのような手法でアプローチしてゆくか、その方向を決めることになった。

まずは、当時代のフランスにおける反ユダヤ主義運動と社会史そしてデュルケムの個人史、生活史、家族史、さらに彼がどのような社会的背景の下、いかに社会学的関心を持ち、高め、社会学者になっていったのかを解明することを当面の研究テーマとし、研究の手法として第1に彼が生まれ育ったエピナル、次にエコール・ノルマル・シュペリユールの受験生活と学生生活をしたパリ、それに社会学構築に努めたポルドーでの彼の社会学研究の背後にあって意味を有すると思われるさまざまな彼にかかわる原資料を探ることにした。そして、こうした研究手法を現地に行って事実を調

べ、資料を収集し、それらを分析しデュルケムを理解をしようとするところから実証的社会学史研究法と称してほとんど毎年夏休みや冬休みを利用して宝探しの旅を始めた。

エピナルは、アルザス・ロレーヌ地方に位置し、デュルケムがラビの息子として生まれ育ったヴォージュの山間にある町であるだけに彼の出生時から中学生時代までのユダヤ教徒としての宗教生活及び共同体生活のありようあるいは反ユダヤ主義体験等々についての記録や資料の発見が期待された。ちなみに、私がこうしてデュルケムに関する記録等の資料を収集して一つ一つを組み合わせて人間デュルケムを明らかにしようとしたのは、部分的には研究されていたが、彼に関するまとまったいわゆる伝記に関する文献がなかったためである。今日ではM.フルニエが2007年に著わした900頁を越える“Émile Durkheim”と題する詳細な伝記も含んだ著書がある。なお、デュルケムのこうした伝記にかかわる資料探しに苦労した後にタルドについても調べたが、タルドの伝記は、デュルケムと違い、立派な研究がすでに存在していて私が改めて散逸した資料を収集するといった作業はしないで済んだ。そうした状況の違いを鑑みて、いかにも二人の出自の差を感じた。タルドは、貴族の家系にあるいわゆるブルデューの言う卓越した家系にあったことが彼の伝記を記録としてきちんと残すことにつながっているとその時強く思った。

さてエピナルで傾注したのは、『自殺論』で論述されたようなユダヤ共同体が事実としてどのようにエピナルにあったのか、そうした事実を証拠として探すことであった。市立図書館、古文書館、県立博物館、古書店、シナゴグ、市役所等々、ユダヤ教徒それにデュルケム家に関する資料、文献を何年にもわたって探し求めた。収集できた資料は、一度日本に持ち帰り分析して不十分な部分、疑問点を整理して翌年再び現地に行って調べるといったことを繰り返した。こうした手法は、パリでもボルドーでも同じように行った。

エピナルの現地調査からは想像を超えたさまざまなデュルケムの幼少期の現実が明らかになった。それらのうちいくつか紹介すると、デュルケムが生まれた頃はゲッターのような状況ではなかったものの、エピナルではまだユダヤ教徒の居住場所はカトリック教徒との混住を認めず、市当局により一定の場所に限定されたり、名前にユダヤ教徒であることを示すためにユダヤ名を付けることを強いられたりしていた(ユダヤ名については、

この後、履歴書について述べる部分で再び触れる)。そうしたユダヤ教徒排斥の中で、デュルケムは生まれ、幼児期をおくった。そして、それまで設置することが認められてこなかったシナゴグは、デュルケムが6歳になった頃ようやく認められ、そこを中心に少数派ユダヤ教徒は自分たちの共同体を形成した。こうしたユダヤ教徒の置かれた状況から薄々わかるように、デュルケムの誕生時のエピナルには反ユダヤ主義が日常的にあったことが認められるが、そうした状況は、デュルケムが12歳になる1870年に勃発した普仏戦争の敗戦が引き金になって高まり、敗戦の原因をユダヤ人によるものとして大暴動まで起った。

まさに、エピナルではラビであるデュルケムの父親を中心に少数派ユダヤ教徒は、デュルケムが『自殺論』で書いたような内なる結束を強めて自らの宗教と共同体を守り、維持することに努めた生活をおくっていた。デュルケム自身はどうかと言えば、彼は父親から将来ラビになることを期待され、生活そのものが宗教の教えを実践する毎日であった。そうした生活は彼が地元の公立中学校に入学する12歳まで続いたが、この年齢になった時に前述した通り戦争が生じた。彼自身、後に普仏戦争の敗戦とそれによる3年間の占領時に不条理な集会的沸騰としての激しい反ユダヤ主義暴動を直接体験したと記しており、彼は青少年期の入口で明確な形で敵意を持つ外部集団を意識させられたのである。

ドイツ軍の占領、反ユダヤ主義暴動といった苛酷な状況下でデュルケムは12歳で入学した公立中学校に3年間通った。彼の成績は、その中学どころかヴォージュ県全体の生徒の中で特にフランス語、ドイツ語、ラテン語の語学と地理、歴史の社会系科目が常にトップを競うほど優秀であった。そして、その中学の授業で注目したいのは、成績の優秀さもさることながら、授業科目の中に精神的衝撃を惹き起させたカトリックを教授する宗教の時間が3年間あったことである。

そうしたエピナル時代の体験がデュルケムの将来にどのような影響を及ぼしたのかを明確にすることはなかなか難しい。ただ言えることは、少なくとも彼はユダヤ教徒としての強力な生活実践等々決定づけられた運命を先ずは受け止めつつ、それらの運命を自らの努力で乗り越えたとともに外部集団に対して敵意をもって抗するのではなく、公正な社会はいかにしたら可能かを考え、そのために彼は教育的使命の重要性を感得し、教育を通して社会を再構築しようとする思いを成したということである。

なお、こうしたデュルケムの特に青少年期のユダヤ教徒としての宗教的バックグラウンドをベースに彼の社会学理論の形成とを関連づける私の研究については、ユダヤ主義過ぎるとか、時代や状況に縛られ過ぎる、あるいは証拠がない、デュルケム社会学は、極めて普遍的であるといった批判を受けることもあったし、逆に知識社会学としてこうした研究は重要という評価を受けることもあった。私としては、デュルケムの孫であるE.アルファンが1987年に、デュルケムが1887年に初めてボルドー大学で講義を行った事を記念して行われた100年記念行事での講演時に語った「デュルケムは、ラビの子であり孫である。そのことによって彼はさまざまな試練を受けた。しかし、彼の著作の中にユダヤ主義の匂いを嗅ぎ出そうとすれば、それはまったく誤ったことである」(Durkheim 100 ans de sociologie à bordeaux) という指摘を十分に受け止めた上で研究をすすめた。

偉大な社会学者の研究プロセスを著書そのものからだけでなく、生活史や家族史等々を通して捉える上で、重要な隠れた資料を見つけ出す作業、すなわち宝物探しは、大変な時間と労力があるものの、時にまだ誰も手にしたことのない小さな発見があることもあり、楽しいものだった。なお、これまでデュルケムの生活史を調べる中で現代フランス社会を考える上でも鍵になる概念があることに気づかされたのでここであえて記しておきたい。それは、反ユダヤ主義、ライシテ、それにエスニシティである。まさにデュルケム問題は現代社会につながっているのである。

さて、エピナルでの手法は、デュルケムの活動拠点の移動とともにパリとボルドーへと続けた。

4. パリ及びボルドー

4.1 パリ

パリでの宝物探しは、デュルケム研究者の間でかなり激しい競争の中にあった。ある日本人研究者からパリでのデュルケム関連資料は全て収集したからあなたはモースなど他の学者を調べたら、といった言葉さえかけられるほどだった。そうした状況にあつて私なりの視点から調べたいことがあった。そのうちの2つをここで報告しておこう。

デュルケムは教育的使命を持ち、将来大学教授になることを目指してパリに出た。しかし、パリに出て苦勞の末入学をはたしたエコール・ノルマル・シュペリユール(以降エコール・ノルマルと略記)の学生時代のいつ

頃から彼が社会学研究に的を絞ったのか十分に分かっていなかった。周知の通り、フランスの大学には当時まだ社会学の講座は開講されていなかった。社会学講座の正式な開講も講義もデュルケム自身が最初に担った。従って、エコール・ノルマルで独立科学として社会学を学ぶ機会はなかった。そこで、パリで第1に調べたかったことは、デュルケムが学生時代何に関心を持ち、どのような本を読んで勉強をして、いつ頃から社会学に関心を持つことになったのか、ということと、第2には、パリに出て精神的経済的にもっとも大変な学生生活をしていた時代から終生友人としてデュルケムのそばにいて影響を与えた人物がいればそうした人物を探し、その影響について調べてみたいと思った。

さて、1つ目のテーマであるが、もちろんデュルケムがエコール・ノルマルで反教権主義や教育の世俗化に関心を持っていたことやE.ブトルー、ヒュステル・ド・クーランジュそれにG.モノー等の大学の指導者とのかかわりについてはさまざまな先行研究によってすでに明らかにされていた。私としては、彼がエコール・ノルマルの学生生活の3年間に、どのような文献を読んで社会学研究への関心を高めていったのかを詳らかにしたかった。そのためにどうしたら良いのか。彼が寮生活をして3年間学んだエコール・ノルマルの図書館に行けば、彼の図書貸出し記録があるはずで、それを調べれば彼の学生時代の学問的関心及び研究過程の一部が解明できるし、それによって先行研究に少し新たな事実を加え、デュルケム研究にわずかばかり貢献ができるかも知れないと考えた。

過去も現在もエコール・ノルマルは、主に教育分野での指導者を目指すエリートたちの学ぶグランドゼコールである。正門にはそこを管理する係員がいて入校する人をいちいちチェックしている。ただし、一見外部の者には入りにくい印象を与えるが、それほど嚴重ではない。次に、図書館に行くと資料を入手しなければならない。やっかいな手続きが待ち受けているかもしれない、あるいは図書館利用のための身分証明書を求められるかも知れない等々考えながら図書館を探した。図書館というよりもこじんまりした図書室への入口といった趣のドアを開けて入口近くに座っていた係員に「19世紀末にここのエコール・ノルマルで学び後に偉大な社会学者になったデュルケムの在学中の図書貸出記録があれば、それを見せてほしい」と告げた所、なんと予想もしなかった「あなたはここの卒業生ですか」と問われてしまった。そこで「卒業生ではないと利用できないのか」

と聞き返すと、「そんなことはない」と言い、「しばらく座って待っていてください」と優しく言われたので待っていると、数分後入口の係員とは別のドフラーニュさんという担当者が奥から出て来て、もう一度図書室利用の説明を求められ、こちらでも詳しく説明すると了解され、デュルケム在学中の手書きの図書貸出記録帳を両腕に抱えて持って来てくれた。

フランスではエピナルにしる、ボルドーにしる、ほとんどの場合文献や資料の調べものをする際に人によって例外はあるものの特に身分証明書を求められることはなかった。もちろん国立図書館のような大規模な図書館では登録が必要な所はある。しかし、ほとんどがまさに誰にでも解放されている。

デュルケムの図書貸出は、大感激しながら写し取ったが、その時先ほど述べた社会学への関心にかかわる記録に加えて次の事も気になった。1つは、彼は入学当初から社会問題に関心を持ち、研究テーマを「個人主義と社会主義の関係」としていたので、そうした問題関心が貸出記録にどのように反映されているのか、もう1つは、彼は入学前後にユダヤ教を棄教しているのでユダヤ教等宗教への読書記録はどうなっているのか、といったことである。

さて、デュルケムの図書貸出記録帳によれば、彼は3年間の在学中にカント、ヘーゲル、スピノザ等々の哲学文献やリボー等の心理学文献を初めとしてエスピナス、スペンサー、コントの社会学にかかわる文献等々合計358冊借り出していた。そのうち1年次の記録からは、カトリック、ユダヤ教、キリスト教、反キリスト教、ユダヤ史等10冊を超える文献を借り出していることが分かった。彼が棄教したことと、そうして残されている記録とがどうかかわるかはわからないものの、入学早々に宗教について高い関心を持って勉強していたことがわかる。もちろんそうしたことは彼の個人的要因だけからのみ由来するものではなく、学問的要因に由来しその結果彼の宗教的知の文化資本として蓄積され、後々彼の宗教社会学研究に生かされたことは想像に難くない。

社会学への関心は何年次から具体化したのか。貸出記録から見ると、少なくとも今日われわれが社会学者と見なしているコントやスペンサーの文献を読んだことを社会学への関心の表れと捉えるなら、それは3年生(1881年)になる夏休み明けエピナルからパリに戻った直後の9月初旬だった。彼は、先ず9月7日にデカルトとリボーの文献を借りている。次

の日にコントの『実証哲学講義』とスペンサーの『科学の分類』を借りている。このことからすると、3年生の始まる秋の初めに彼は社会学に関心を持ち、研究の入口に立ったことになる。モースによれば、エコール・ノルマルに入って彼は「個人主義と社会主義の関係」をテーマとして研究したが、その研究はまだ抽象的哲学的であった。彼が社会学的な研究テーマ「個人と社会の関係」を掲げて研究を始めるのは、エコール・ノルマルを卒業した翌年の1883年である。そうしたことから彼は学生最後の81年9月に社会学文献を本格的に読み始めてから約2年間を経て哲学的研究から社会学的研究へと針路を確定していったと推察され得る。

デュルケム若き時のみならず生涯にわたる政治的社会的関心や思想を知るためにもパリでの宝探しのもう1つはデュルケムと共に学び、論じ、影響し合い、生涯を支え合ったかけがえのない友人について調べることであった。彼のエコール・ノルマル入学後の友人関係については、先行研究でH.ベルクソン、V.オンメイ、M.オロー、J.ジョレス等がいることは良く知られていた。私としては、彼らの中からエコール・ノルマル入学のための受験勉強時代から彼の生涯にわたって影響し合ったジョレスを特別の存在としてピックアップすることにした。

デュルケムとジョレスとの関係で明らかにしたかったことは、1. いつどこで知り合い、どのように友情が深まったのか、2. 2人間の政治的社会的関心と共感の実態等であった。なお、ジョレスに関する詳細な資料は、彼の生まれ故郷のカストルにあるジョレス博物館で入手した。

2人の出会いは早かった。それは、デュルケムがエコール・ノルマル入学を目指して生まれ故郷を離れパリに到着したその夜であった。心配性のデュルケムは、誰一人知り合いもなく大変な不安を胸に厳冬の夜パリに着いた。誰も彼もまったく知らない人々が通り過ぎてゆく喧騒の大都市を孤独感を身にしみながら寄宿先のジョフレ・ペンションを目指した。そのペンションは、カルチュラタンを貫くサン・ミッシェル大通りをセーヌ川を背にしてソルボンヌ大学前を通り、さらに坂道をまっすぐ進み、右手にルクサンプール公園と鉱山大学校、左手奥にパンテオンの建物を見て、さらに少し歩いた静かな大学街のはずれにあった。そのペンションに約1カ月前にデュルケムと同じ目的を持ってフランス南部の田舎から来て寄宿していたジョレスがいたのである。なんと初日に山深いエピナルから出て来たデュルケムにとって何ともホッとできる同年代の青年との出会いであっ

た。ジョレスは、がっちりした体格で明るく弁舌さわやかな好青年で、同じ目標を持った2人はすぐに打ち解け受験勉強に励むとともに社会問題についても議論し合うなど友情を深めた。デュルケムにとっては決定づけられた運命を自らの努力で切り開くためにおおいに力となる友人との出会いでもあった。具体的に言えば、それは先に述べたデュルケムのユダヤ棄教棄教問題である。彼は、エピナルのコレージュ時代からノンビリープについて深刻に考え一人悩んでいた。棄教への重い決意に踏み切らせたのは、ジョレスとの出会い後であった。つまり、信頼できる友人との交流がデュルケムの新たな生き方を決意させる力となったのである。2人の友情は、その後デュルケムが社会学者となり、ジョレスが社会主義者となり国会議員として活躍した後も以下の通り各々の立場、思想を理解し、尊敬し合い生涯の友情を深めることになる。

彼らが苦勞の末大学入学を果たした1870年代後半は、フランスでは依然として対独復讐を声高に呼ぶ時代であった。しかし、2人は平和主義の立場にあって共和派の領袖で教育制度改革に努めていたJ.フェリーの支持者となり、自由主義や社会主義について昼夜を問わず議論した。彼らは、後にデュルケムの道徳論と教育論の観念の根幹を成すことにもなる教育の世俗化と反教権思想を共有し、経済的自由主義を示す個人主義を批判し、社会主義への関心を高めた。そして、19世紀末のフランスの国論を二分したドレフュス事件では、デュルケムは当時ボルドーにいて人権同盟ボルドー支部長としてドレフュス擁護派の大運動を指揮していた。ジョレスはこの問題に当初はあまり関心を示さなかったが、デュルケムが熱心に説いて擁護派の仲間へ引き入れ、2人は共にこの問題でも闘った。社会主義についてもジョレスはデュルケムの社会主義観念を称え、デュルケムは国会議員ジョレスの社会主義に共鳴して彼を支えた。2人は、活動する世界を異にしたが、共に関心を共有し、生涯強い絆を有した。

デュルケムは特定の政党支持、つまり政治的立場を明確にしなかったが、明らかにジョレスの社会主義の共鳴者であった。そして興味深いことにデュルケムはジョレスの政治活動に直接参加することはなかったが、ジョレスの元にはデュルケムの弟子や仲間、例えば、レヴィ・ブリュールやモース等々デュルケム学派の主たるメンバーたちが集まり、彼の社会主義活動に加わったり、彼の発行した新聞「ユマニテ」紙を支えたりした。これらのことは、まさに、デュルケムとジョレスが長年育んできた友情を

母体にして社会学と社会主義の2つのグループが1つの活動体を形成させたことを意味する。

4.2 ボルドー

デュルケムはボルドー大学で目標としたフランスで初めての社会学の大学教授職を得た。彼はボルドー大学在職中に彼の主著『社会分業論』『社会学的方法の規準』『自殺論』を発表し、デュルケム学派の母体となる「社会学年報」を発行して科学としての社会学を確立させて社会学者としての地位を確実なものにした。そうした経緯からしてボルドーは彼に関するお宝が多く眠っているように思った。特に、彼の著わした論文や著書ではわからない諸事実が残されており、それらを探ることができるかも知れないと考えた。彼は毎年度担当した社会科学講座に講義テーマを付けてそのテーマに沿った対象と方法を明確にして社会学を講義することによって、いわゆるデュルケム社会学を構築した。そのため、ボルドーでの15年間の毎年の講義テーマとその内容がどのようなものであったのかを知ることこそが彼の社会学形成プロセスを考察する上で極めて重要であった。

しかし、それまで彼のボルドー大学での講義テーマとその内容について部分的に散見される程度で総合的統一的に明らかになされてはこなかった。そこで、デュルケムが社会学構築に最大限の力を注いだボルドー大学で何をどのように教授し、社会学を作り上げていったのか、そして彼の教育者としての評価はどのようになされていたのか等々に関する原資料を手に入れることを最大の照準にしてボルドーに8年間余り通った。

言うまでもなくボルドーは、エピナルとは桁違いの大都市であるだけにお宝になる資料がどこに行けば存在しているのか探するのに当初苦労した。ボルドー大学の図書館をはじめ市及び県立の図書館、古文書館、博物館等々手当たり次第に探した。数年してから県立古文書館に狙いを定め、毎年そこに時間をかけて通った。すると3年目に係員がデュルケムに関する未整理の資料があると言いながら古い紐で雑然と束ねられた茶色に変色した大きな書類と思われるものを手に抱えて持ってきてくれた。

それらの資料は、未整理であったため古文書館のラベルもナンバーもなく、従ってこれまで公開されることはなかったようだった。そして驚いたことに資料には個人情報非公開と書いてあった。中を一つ一つ調べるとデュルケムがボルドーアカデミーと公教育省に提出した履歴書と彼のボル

ドー大学での講義テーマの記録やどのように講義を行ったのかとその評価記録、講義の曜日、日・時、受講学生数と学生による評価表等々の書類がバラバラに収められていた。それらの資料のうち彼の講義への評価記録は、おそらくデュルケム自身読んでいない原資料で、それを100年を過ぎて日本人の私が読んでいると思うと何とも不思議な思いがした。

資料全体からは、社会学の将来を背負った若きデュルケムが講義を通して自ら新しい科学を築こうとする意欲を強く感じさせられた。そして何よりも講義テーマとその内容を収めた資料は彼の社会学形成プロセスを理解する上で貴重である。それらのデュルケムのボルドー大学での各年度ごとの15年間に及ぶ『社会分業論』や『自殺論』といった著書になる前の理論や方法論、さらに著書にはならなかったがゆくゆくは著書にまとめる予定とされた家族論や道徳論等々の講義テーマと内容に関する資料を目にした時、感動してこれを元にデュルケムに関する博士論文が完成させられるとさえ思った。資料は食事を忘れてとにかく写し取った。

同時に、それらの資料の中で副次的な資料ながら目に止まったのは、彼の履歴書とさらに彼の教育者としての能力とともにどのような人格の持ち主であったのかさえわかる評価資料だった。

それらは、デュルケムの社会学そのものを理解する上で特段の手助けになる資料とはいえないが、彼の社会学者としての人と知りを知る資料として興味深かった。先ず、履歴書であるが、なぜ興味を持ったかと言えば、その一行目に彼の名前が記してあってそこに私としては単にEmile Durkheimとなっていれば特に驚くこともなかったが、Emileの前にDavidというユダヤ名が記されていたためである。

ユダヤ名を付けることは、1808年のナポレオン勅令により施行された名前によるユダヤ教徒識別化政策によるものであった。しかし、デュルケムの生きた時代は廃止され、一般的にはそうした政策はとられていなかった。ただ興味深いことは、前述した通りデュルケムが生まれた時期のエピナルでは市当局によってまだそうした考え方が残っていてデュルケムはDavid名を付けられていた。本来であれば、ボルドーでもどこでも当時は公的な正式書類にDavid Emile Durkheimと名乗る必要はないと考えられるが、デュルケムはそうしなかった。それはなぜか、と考えた。正式名としてフルネームを求められたものなのか、自ら正式名として記したのか、あるいは棄教したとはいえ彼のユダヤ教徒としてのプライドがそうさせた

のか、真相はわからない。ただデュルケムの生きた時代と社会の空気感を彼のその履歴書の名前の記述から読み取るしかない。

もう1つ目に止まった彼の評価記録は、教育者及び人間デュルケムを知る手掛かりとなる貴重なもので、まさに、履歴書とともに秘密情報入手できたという意味でお宝中のお宝に出合ったとその時思った。それらの資料を整理してデュルケムのパーソナリティを浮かび上がらせると次の通りである。

① 性格は品位があり、公正で自己抑制力が強い、② 知的能力は、聡明で判断力に優れている、③ 教育者として熱意があり、職務に献身的で非の打ちどころがない。表現方法は、雄弁で力強く説得力があり、自信と威光に満ちた語調である。まさに欠点のない教育者であり人格の持ち主であるが、欠点もある。それは、社交性に欠けることと、研究に熱中するあまりたびたび健康を害したといった点である。以上は公的評価である。社会科学講座の学生の評価もある。それによると、デュルケムは素晴らしい先生だ。単に講義がずばぬけて明晰であるばかりでなく、仕事に深い愛着を持っている。どの講義も繊細な文字で板書され、厳密な証明の形をとって常に講義した。

これらの評価からは、身体を害することも恐れず、全力をあげて新科学を創ろうと躍動する教育者そして研究者としてのデュルケムが垣間見えるし、かつ大学関係者や学生たちがその科学とそれを講じるデュルケムにいかにも魅了されていたかも見てとれる。私としては、教室の入口の隙間からデュルケムの講じる姿を少しだけ見させてもらったようなそんな感覚である。

以上、デュルケムの社会学がどのように形成されたのかそのプロセスを理解するためにとった1つの手法として彼の生きた足跡をたどって、残された宝を探し求めたほぼ40年間の自分流の研究史の一部を振り返った。

デュルケムの活躍した時代に遡り、現地で資料を漁る中でエピナルでも、パリでも、ボルドーでも、サルラでも、常に利用した機関や施設の関係者のかけがえのない助力がなければ、思うような資料を得ることはできなかったし、研究を進展させることはなかったと改めて思う。

5. 新しい扉を開けて

1975年の夏、デュルケム研究を始めた頃ブザンソン大学の裏通りにある

古本屋でデュルケムの道徳社会学を批判した本を見つけた。それは、1912年にルーヴァンカトリック大学の哲学高等研究院院長のS.ドゥプロワージュが著わしたものだ。

この本は、ドゥプロワージュがデュルケムの社会学をドイツの輸入品と一種デュルケムを賤しめるような批判をしたことによってデュルケムが直ちに1913年の「社会学年報」で自分の社会学はシュモラーやワグナーよりもはるかにコントの影響を受けている、ドゥプロワージュの私へのそうした批判は、悪意を持った議論であるし、フランス社会学を失墜させようとするものであると反論して、自らの社会学が主に誰に由来しているのかを明かすその元となったことで知られる。

その批判本が出版された1912年当時は、デュルケムと彼の学派は「社会学年報」を中心に一大勢力を誇っていた。そうした中でデュルケムは世俗的道徳論に立って宗教原理に基づいてフランスの社会秩序を再建しようとするカトリック学派の説く社会学を護教論として強く批判していた。ドゥプロワージュは、ル・プレー以来一定の勢力にあるカトリック学派を主導する立場にあってデュルケムの道徳社会学と真っ向対峙した。

最初、ドゥプロワージュのその本を手にした時、上記のような背景からカトリック学派の宗教原理に基づく道徳の復興を説く偏狭なデュルケム批判本かと思った。しかし、少し目を通してゆくとそうではなく19世紀末から20世紀初頭を代表するデュルケムとレヴィ・ブリュールの道徳社会学を正面から真摯に論じたレヴェルの高い優れた研究書であることがわかった。

今までデュルケム研究に重要と思われる部分に限ってこの本をつまみ食いの的に読んで済ませて、そのうちきちんと読もうと思っていた。今ようやく時間を経てデュルケムがまさに大活躍している時代に彼の道徳社会学を堂々と論じたこの本を手にする時がきた。どこまで読みこなせるか、ドゥプロワージュに挑みデュルケムの新たな研究に繋げようと思う。

付 記

本稿は次の拙書を主に参考にしている。

文 献

- 夏刈康男, 1996, 『社会学者の誕生——デュルケム社会学の形成』恒星社厚生閣.
——, 2008, 『タルドとデュルケム——社会学者へのバルクール』学文社.
——, 2016, 『デュルケムの社会学』いなほ書房.